

那須日赤病院の看護師さんたちへ

皆さんから「何処の生まれですか?」「なぜ、日本に来ましたか?」と、よく言われます。

私は 88 年前に、フランスの田舎、Faveraye-Machlles (ファヴレー マシエル) という村に生まれました。両親と 8 人兄弟で、私は末っ子です。村の中で生活用品などを売るのが父親の仕事で、母は家事の傍ら店の手伝いをしていました。裕福ではなかったが、幸せでした。

特に毎日曜日、教会でのミサに参加することが、大きな喜びでした。村の人々も私たちも、平日の服を着替えて、鐘の音に招かれて、教会に集まるのでした。

ある日曜日、神父さんの説教の中で、こう言われたことを今も私は良く覚えています。「イエズス・キリストのことを知らない人々が、多い国々があります」と。私は 8 歳の子供でしたが、直ぐ考えました。

「イエズス・キリストを知らない人々がかわいそう!! 日曜日のこの集まり (ミサ) の喜びも知らないのはかわいそうです。だから、彼らに伝えに行かねばならない! 自分も行かねばならない!」

その考えは 10 歳頃消えてしまいましたが、12 歳の時、ある神父さんの言葉で思い出しました。それで、13 歳から司祭、または、宣教師になるための学校に入りました。多くの人々の助けを得て、25 歳でパリにある神学校から日本に派遣されました。耳をかしてくださる人々にイエズス・キリストのことを伝えるために・・・。

考えてみると、看護師の皆様も同じような道を歩いてこられたのではないのでしょうか? 何歳からか、私は知りませんが、ある方は子供時代に、ある方は青年時代に「病者や怪我のために苦しんでいる人々を助けなければならない」と、お考えになったのでしょうか。そして、看護学校でよく勉強されて、今、この日赤病院で素晴らしいお働きをするようになりました。

家庭の世話をしながら来ておられる方、独身で生涯を看護師として生きる方、と様々な立場の方がおられると思います。看護師の仕事をお選びになったという事を、幸せなことと思います。

私もイエズス・キリストの宣教師として日本に送られたことを、私にとってとても幸せな事と思っています。

ロランド・ピエルより